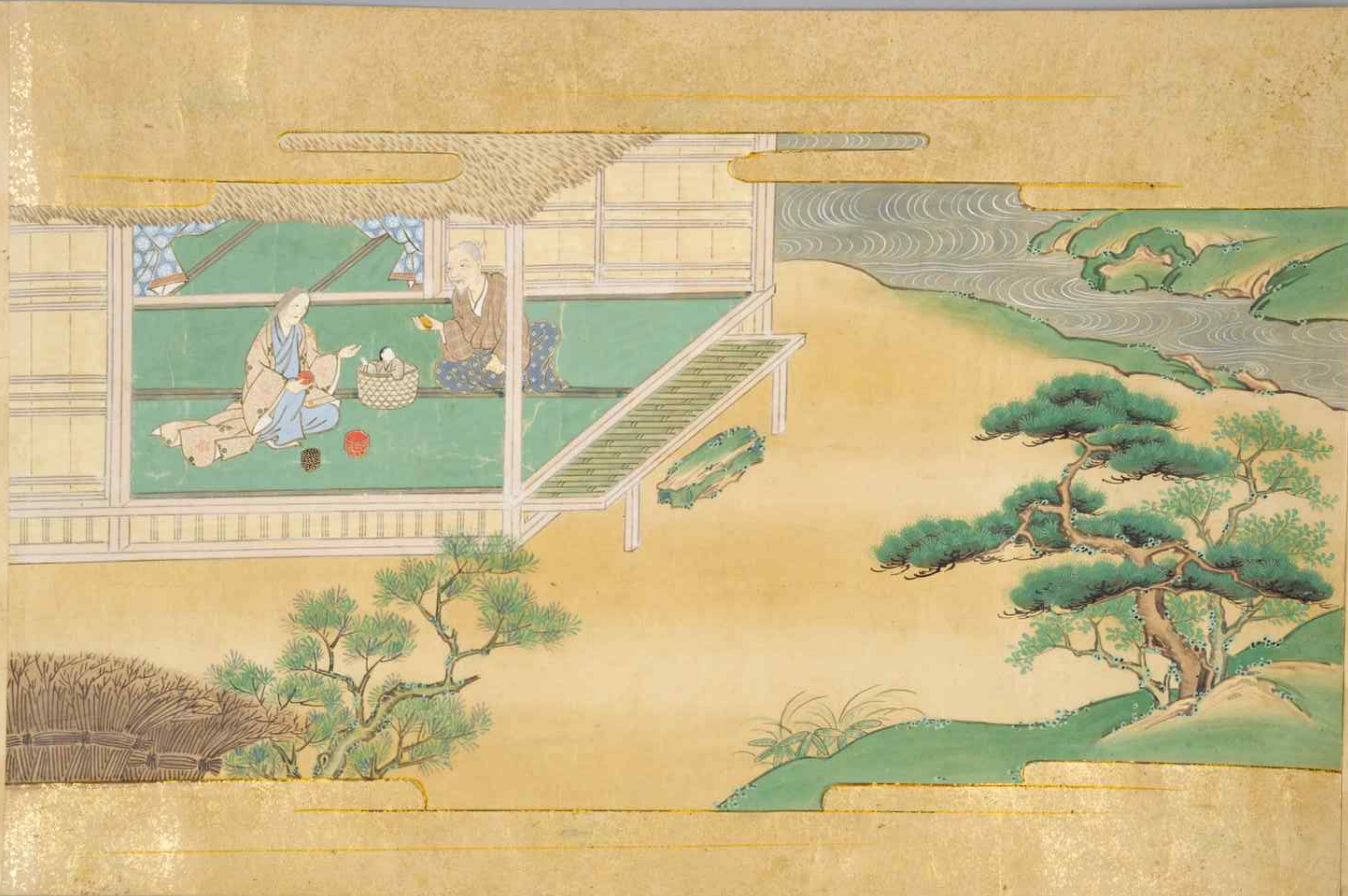

竹とり物語　上

いまはむかしたけとりのおきなといふ
ものありけり野山にまじりてたけを
とりつゝよろづの事につかひけり
名をばさかきのみやつことなんいひ
けるその竹の中にもとひかる竹なん
一すぢありけりあやしがりてよりて
みるにつゝの中ひかりたりそれをみ
ればみ寸ばかりなる人いとうつくしう
てゐたりおきないふやう我あさごと夕
ごとにみる竹の中におはするにて
しりぬ子となり給ふべき人なめり
とて手にうち入て家へもちてきぬ
めの女にあづけてやしなはす
うつくしき事かぎりなしいとおさなけ
ればこにいれてやしなふ竹とりのおきな
竹とるにこの子を見つけてのちに



れハこにいれてやしなふ竹とりのおき
な竹とるにこの子を見つけてのちに



とりけるにふしをへたてゝよことに
金ある竹をみつくる事かさなりぬかくて
おきなやう〳〵ゆたかになりゆくこのちこ

とけれは節をへたてゝよことにこか
ねある竹をみつくる事かさなりぬかくて
おきなやう〳〵ゆたかになりゆくこのちこ
やしなふほとにすく〳〵とおほきになりまさる
まさる三月はかりになるほとによきほと
なる人になりぬれはかみあけなとさうして
かみあけさせきちやうのうちよりも出さす
いつきかしつきやしなふこのちこ
のかたちけうらなる事世になくやの
うちはくらき所なくひかりみちたり
おきなこゝちあしくくるしき時もこの子を
みれはくるしき事もやみぬはらたゝし
き事もなくさみけりおきなたけ
をとる事ひさしくなりぬいきほひまうの
けり子いとおほきに成ぬれは名をみむろ
といんへのあきたをよひてつけさす
あきたなよ竹の
かくやひめとつけつ

さかとき三日うちあけ給そふまる川乃ほそ
ひをそしけれ都ところをさうらふ波





はかなく三日うちあけはてぬれはりのほそ
ひきそへしけるほとにこそころもとなく
よひはつくいとしくはてぬ世界の
をれくあてなかもいやしきもいふての
くやひさしうえてしられてかれと
ねこにきてぬてしまへ我の行あめ
わかさまも家にはすもとゝ人くふたなや
まくみなましこゝろの袂よりはやきさき
いふはいやこの衣もともかしこより
そこさかひもろんまくひけてわたさはとこさ
よきさんよるへひといひもつ人の物とても
きね取よまさひあまけれともなほふれ去りし
あまくもとみこの家の人ともに物をたふ
いさんとていひかくれとこそまされあ
まかりをもすれね君達とふらひしはへらく
らむの人かはらかけるをこそなかるひとよ
うすさありさまよしすりけむそて
をかりよきの中に子供いひけるに
いかこのことといふて人と人ありしひやむと
きゝりよきたるかの君達一人
もりしけれは御子一人おさくしまれ
御子 [illegible] 右大臣 [illegible]

よりなんよはひとはいひける人の物とも
せぬ所にまとひありけともなにのしるし
あるへくも見えす家の人ともに物をたに
いはんとていひかくれともことゝもせすあ
たりをはなれぬ君達夜をあかし日をく
らす人おほかりけるおろかなるひとは
ようなきありきはよしなかりけりとてこ
すなりにけりその中になほいひけるは
いろこのみといはるゝ人五人おもひやむと
きなくよるひるきけりその名とも一人
はいしつくりの御子一人はくらもちの
み子一人は右大臣あへのみむらし大納言
一人は大伴のみゆき中納言一人いその
かみのまろたりこの人〻なりけり世中に
おほかる人をたにすこしもかたちよしと
きゝてはみまほしうする人ともなり
けれはかくやひめをみまほしうて物も
くはすおもひつゝかの家にゆきてたゝ
すみありきけれとかひあるへくもあら
すふみをかきてやれともかへりこともせすわ
ひうたなとかきておこすれともかひなし
とおもへとも









霜月極月のふりこほりみな月のてり
はたゝくにもさはらすきたりけり人々ある
ときは竹とりをよひ出してむすめを
我にたへとふしおかみ手をすりのたまへと
おのかなさぬ子なれは心にもしたかはすなん
あるといひて月日をすくすかゝれは此人々
かへりて物を思ひいのりをしくわんを立
おもひやむへくもあらされとさりともなを男
あはせさらむやはと思ひてたのみをかけたり
あなかちに心さしを見えありくこれをみつ
けておきなかくやひめにいふやう我子の仏
へんけの人と申なからこゝらおほきさ
まてやしなひたてまつる心さしおろかなら
すおきなの申さんことはきゝ給ひてんやと
いへはかくや姫なに事とのたまはんことはうけ
けたまはらさらむへんけの物にて侍けん身
とも志らすおやとこそおもひたてまつれといふ
おきなうれしくものたまふものかなといふた
これ年七十にあまりぬけふともあすとも
志らぬ此世の人は男は女にあふ事をす女は
をとこにあふことをすそのゝちなん門ひろく
もなりはへるいかてかさる事なくてはおはせん

あはれなるしるしものゝふのかたしけなた
されは年十五にはかりぬれともあすとも
しらぬは世の人なり男は女にあひ女は男をも女は
ならにはふかく心をそめてちきりをふかく
ちきりはいつそてかさかまさりてはかなさん
うくやなみたのいろふかくなんてうさかりし
はんとのみいひあらんけれ人といふとも女の身
なからなかりけれのはかんかきりはかなくても
いませうしこの人この年月をつくしかりぬる
なましつゝのこるまふかきとおもひさためて
ひとめもくはあひみんやといふもかなしやひめん
いつくともあかねかきちとぬれきぬもなつ
てあさんなけきさらはゆらへやしきさすま
あらつきをとおりふかきとあり世のならひさき
人なりとも物いふことさしをおもひてはあひ
うらしとなんおりふしふかきいふかされいつくまひ
ぬるものゝあはれもしくいふやうなりて
ろさしはらん人はいはんとかけたまへるの
んしをつゝなからぬ人まさてあはれなかく
やひめのいつくかはりぬあつきさるみも
といはんいさくかぬまるをかりぬさりは
こゝろむる人の中に猶しきものをみせ
めてたん小御んなしゆかりそうそてつう
まつんと杵のかたすまん人とまかめへといふは

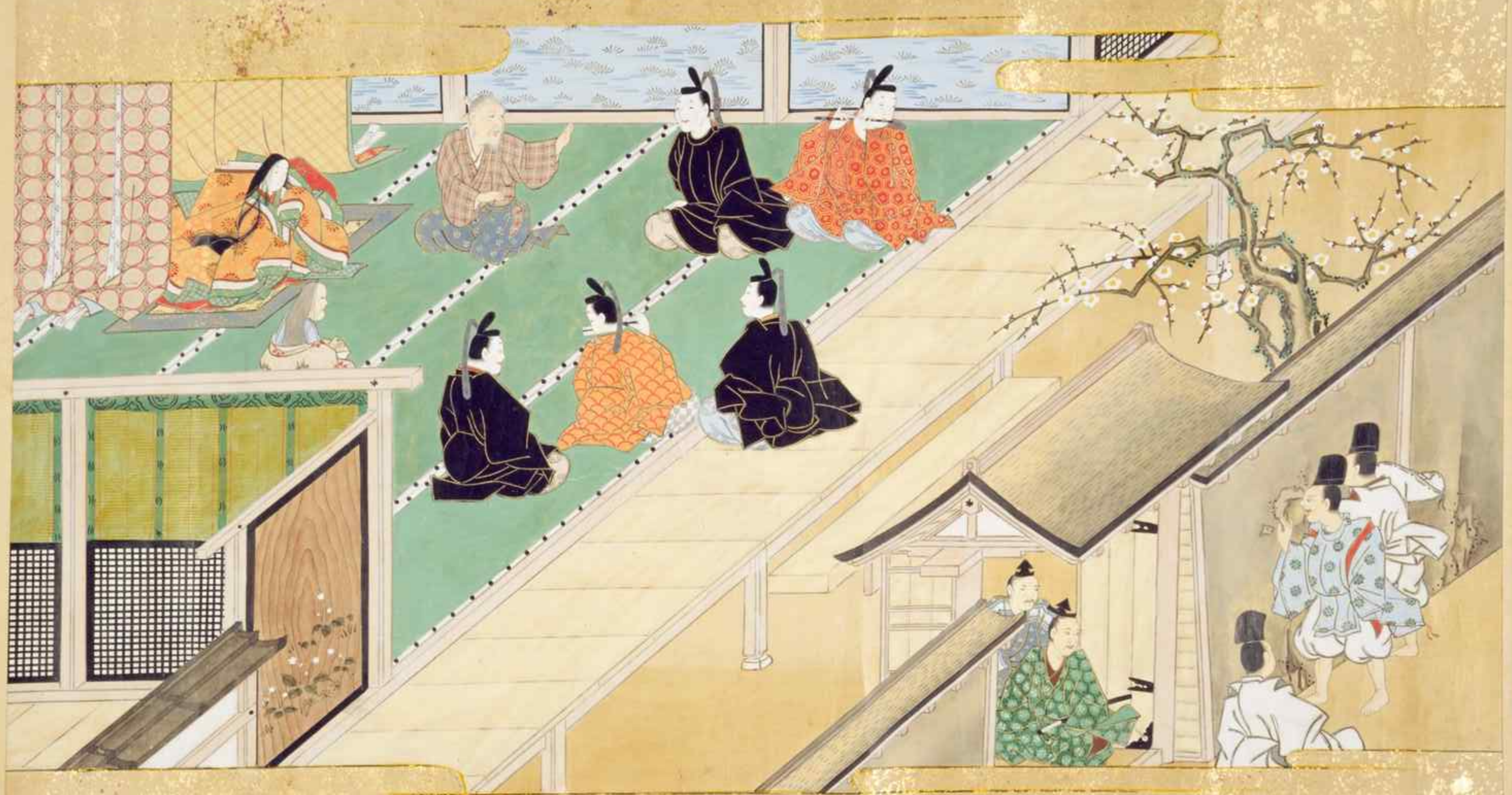
人なりとも物のさたしをもしてはあひ
かくしとあんおりふしふかされいたく思ひ
ぬよくもののあはれもしくいかやうなる
ろさしけりん人はかならんと御目をかけ
らるしとろつるぬ人までもあはれかく
やひめのいかくかつりぬあくさたろみむ
といらんいはくかれまゐるをよりさりは
三のむかし人の中に松しきものをみせ
め人らん小御らんしゆかりをもてつかう
まつらんとおものかたさすん人ことにやめてといふな
こさ中なりとらそろ日ちろて引きいれなかろ
まかね人てあるひるゆえとめてさ成はてきを
うるひ我はあやうなとしあるひいうを我ね
さきあめてさとありしありすにめされたる
いとくろうしきれくきくるけるかところ
は年月をつくされしのみ中あつらく
りしとまつとやしかされの御ちらふあそと
もあつねとくのみ君達もしよくかれひ
きこめてはつらまつれともし

ことさとし

参り



なり



いつれをとも分きかつしまさ[illegible]はれん
さしのれとおみゆるしつきまつん申そ



いつれもおとりまさりおはしまさねは御心
さしのほとはみゆへしつかうまつらん事は
それになんさたむへきといへはこれよき
事なり人の恨もあるましといふ五人の
人ともよき事なりといへはおきないりていふ
かくや姫石つくりの御子には仏の御石の
はちといふ物ありそれをとりてたまへといふ
くらもちの御子には東の海に蓬莱といふ山
あるなりそれにしろかねをねとしこかねを
くきとししろきたまをみとしてたてる木
ありそれ一えたおりてたまはらんといふいま
ひとりにはもろこしにある火ねすみのかは
きぬをたまへ大伴の大納言にはたつのくひに
五色にひかる玉ありそれをとりてたまへ
いそのかみの中納言にはつはくらめのもたる
こやすの貝ひとつとりてたまへといふおきな
かたき事にこそあなれこの国にある物にもあら
すかくかたき事をはいかに申さんといふ
かくや姫なにかかたからんといへはおきな
ともあれかくもあれ申さんとていてゝかくなん
きこゆるやうに見給へといへは御子たち上達
部きゝて

すゝそてにまいけるにいつしよのみもにす
うくかくさまとはいはゝいさんとふかく
やひめけふのかきりんとゆへてわされゆとも
あまりくもにまいさんとくおてかくすん
やまゆのやうはたのゑんとしへて御子あち上達
部きてゝをのくのはにくりかりうなおに
つきにそれてやいろのしまられとさてらんして
られくりぬか綾は女みなくちせいあの袖
しきゆちのしられそてんちくはにう
抱とりてあねをのゝいとおりひめくらして
いしはくりれ孫子いまろのしくあかん
まて天ちくふ二州とすれちゝを百万里
れかといつくりともいそてかへさとおもひ
てかくやひめのりとゝのにそふまん天ちくへ
石れちゝよわりは修ろときゝせく三年八
まわ太わのふと銀ちれら金わはあたし
ちよふひんすゝのまへまちちれひくゝろ
まもんつきゝ添をとりてみしきれめく
ろはのくはくつま花のえゝは浅きく
かくやひめの衣はりてきてみをたれい



かくやひめあやしうてみ給へはちられ
中に文ありひらきてみ給へは





かくやひめあやしうそてみまいらすれ
中に文ありひらきてみまい
うちしれみちは心をはらしてそてるらし
ぬちちのすゝきなりまけかくやひめひ
うれやけりとみるにわするゝちりのひかりた
ふすし
おくはるのひかりさえこにもやとさらし
むくられしもそすみりとあらん
そてめしものをちらを門にすてゝけさみ
ぬしをは
さらしみふあまたもりぬらすなかれて
ちゝをとすてしもあのさらとうろ
とよみくへりかくやひめみしもきは
ありねみてすみきて入りけまえてひかて
はらひてよりぬかのちゝをすてゝみひ
けるありそおもりのことをいちゝをとす
つゝとゝけつくこをちのはなみをさらえ
かわのへてあやけみははらしれあ
まゆあをまゆんとてゆゆやてかくや姫
のむかひむのえくとりまさんまうのといへ
きくらりのみまはうまつのきんへと
みかはあまてれ

うりわたく人とて あかでけるはゝはうしみれ
まゆわかは御うしんとていと御いとをしや姫
の御さまは玉のかほかたちさりはすんまつといへ
きくさりのふはけうまつらさんと
みな難波まてれをくらりさまかれさいれて
きのひてよの絡させて人をしはまうかそお
りしまされちうりけうりまつかささりして
おつひれをくるわぬ人をえんなすわあたく三日
ゆうりなりてここさのねかわくことみる師
うわされたる時一川のくうくありける数
ららあゝこ六人としてたやたく
人のわかましき家をはけりてなと銭
三度ふしこめて身をくるを入すといつれ
子ともあれしとこうふさよわすかひくなる
せすひたはかまり十六そ銭なんふくとを
あけて玉のえくる銭はけり結かくやひ
ぬのふやうふあつれつらある川とうし
うくあそりくなふたにみそつふを
て出ねあふめりてくりきるまそりと戻ふ
はけやりていとゆくくるしうわある
やさしてまゐあつわむくる人あわくまいり
あわ玉ぬえくとはするひ川まいれくぬ
おゆひくるそてまつりいうゆかをんくるも
ちの御子ならんとて恋ぬ花物くのか

はしやらし
やうして辰のつかふ人〳〵おほく侍り
身つもれぬことは侍るひ川よいかくお
おほひくうちてまつりつゝゆかしくなるも
ちの御子あらんて忠ぬ花形くのか
うまのつかと乃しつかなれとかつや姫
きこて我たけ給ふにまけぬつしと
はつれておりひろかすなる門をた
たきてくらのちの御子おつこりけ
はく綾乃御もうくなのつおりこり
とつるあひなきの御子乃給ひいはち
をすてくれの子にえくおもくさてうとて
かくやひめよろせなりめてとつてさされ
まちていまうりけるまのえくよゆかん
そつきてりける
いふつくま身にすりつとも乃えと
　おそりてさうふしろくさまし
これをもおれとも見てそうふ竹え
ぬきされたりしうまのつくいつくけ御おま
やめひしてならいぬむ乃えうそつ一けた
ぬ家をおやきうくれりておりしまかり
なかの我うちてとうくやつさきひの御も
くるかりつわの御ぬつともなまのかくし
ておりつまりけちやけはるまあひ
はつきりかへといふなわもいろはつ

なかの代ちかてとくわつきあきらひれ御せ
くにあさわの御ゆかしもをとのかなし
ておはしましけりちかやけにまあひ
はからくわりたへといふ物もいれにつ
らんとはさていましくうらしけれ
おほひめけれはやまさくらのはなかつ
もとはふましにえんかのかりかね
かされたれはおりふしにはなとねむれ枝に
つまは度ごとにそていまひやさん人花もよ
こさんはおもかれていひめくりかゝやいめ
のつふやうのあゆみまをひらきあり
いなひやさんそのいとおしさはるかく
さきのをかくおさましくてそてそうつ
まを移うくおひのかうさは移やれう
ちきりひかとをかきされはすふやうり
めつるのあはけ木のゆひきんあやし
くうかはりそめてこれ神よりやゝ御
子ゆくてのこかくさかしに九二月乃
梅のかうとえりしかおかつす
なくて世中ふりさいかそせんとあり
かくあるむかしの風をゆかしくはりそ
いのちあさくいてをせんまてはりんそより
くはりきてかうらいといふかんなはさや
と海まらうきあへひたりさて我あの

たゝむなしき風にまかせてありけり
いのちしなはいかゝはせんいきてあらんかきりか
くありきてほうらいといふらん山にあふや
と海にこきたゝよひありきて我国の
内をはなれてありきまかりしにある時は
なみあれつゝ海のそこにも入ぬへくある
時は風につけてしらぬ国にふきよせられ
ておにのやうなる物出来てころさんとし
きある時にはこしかたゆくすゑもしらす
海にまきれんとしきある時にはかてつきて
草のねをくひものとしきある時いはんかた
なくむくつけなるものきてくひかゝ
らんとしきある時は海の貝をとりて命
をつくたひのそらにたすけ給ふへき人も
なき所にいろいろのやまひをしてゆくへ
そらもおほえす舟のゆくにまかせて海にた
ゝよひて五百日といふたつの時はかりに
うみの中にはつかに山見ゆ舟のかちをなんせ
めて見る海のうへにたゝよへる山いとおほ
きにてありその山のさまたかくうるはし
これやわかもとむる山ならんと思ひてさす
かにおそろしくおほえて山のめくりをさし
めくらして二三日はかり見ありくに天人の
よそほひしたる女山の中よりいてきてしろ

これやわかもとむる山ならむとおもひてさすか
におそろしくおほえて山のめくりをさし
めくらして二三日はかり見ありくに天人の
よそほひしたる女山の中よりいてきてしろ
かねのかなまるをもちて水をくみありく
これをみて舟よりおりてこの山の名をなにとか
申すととふ女こたへていはくこれはほうらい
の山なりとこたふこれをきくにうれしき事
かきりなしこの女かくのたまふはたれそと
とふわか名はうかんるりといひてふと山の
中に入ぬその山をみるにさらにのほるへき
やうなしその山のそはひらをめくれは世中
になき花の木ともたてりこかねしろかね
るりいろの水山よりなかれいてたりそれには
いろいろの玉のはしわたせりそのあたりに
てりかかやく木ともたてりその中にこのとりて
もちてまうてきたりしはいとわろかりし
かとものたまひしにたかはましかはとこの
花をおりてまうてきたるなり山はかきり
なくおもしろし世にたとふへきにあらさ
りしかとこのえたをおりてしかはさらに心
もとなくて船にのりて追風ふきて
四百余日になんまうてきにし大願力に
や難波よりきのふなん都にまうてきつる

ありのまゝけうきをかわてしりうえみるよ
心ときゝて証よめりてかひ風情きこく
四百余州ふふみんまうてきゝめし大勢力よ
や難波よりきこのふ面都よ由りてきゝ、
おきらふ塩よねまとあつふねりきかね色
なそあん立まうてきうつるとれあへてかきされ
きゝてありなけきてよみつ

それ竹の世ての茎と呑む山すとも
さやうのひとしき物しとのとかし
これを御子やのそてあつられ日ころありひるひ
竹つゝ心るけふあんおつらめわつとれつまへひく
ぬし

わつみりとえふりけまいうとひりしきぬ
千年のそともまぬし
とののひかり所かとふおきくことも六人ほとる
て角ふお采一人の男ぬそそきさ大文をそ
さみくやくもむつきのかくさあやこの
うちまるやしさく玉ね木をはくりつふね
つりしまおおをあらて千余けるか力を
はらしあのまりそくなりし寸龍よろく
いまる竹つれこれを竹てわつきけとり
強せんといひくさけるの竹ねれかきれ
ぬあくみそうやまいはすりとかておき
おり御子ねわまりもしはしねやらしきて

けさの文をよれといひくとれは文はやうやう
やう御子の君千日やしきたまはりて候と
よろしとかすし所よかくまいらせ候かし
こなたのえたをつくせのひくさまとも
あまりてむと何のひきこれをけふおんする
小御つかひとかくしまいらせ候かや姫君
くるまのふかりひとひつかうらわくひさう
へくかされとひよりてはやう給へとおほせ
らいの本よりてかりひつまゐくあさましく
きうらしてまけまいらせはやう御めやと
いへともかされうふさくうふ候へせらるゝ
そのとやすまいてのくさんこといとやましく
うすつきをりかくやらせんれんゆきさそ
けりつかうされ候へし
なほとかくさてみつまいてまいれたち候
うされうひえくうすそけりける
心にまいりまいらせ候えてもおもしつ折に
のかされさいわかくうひつかうさすかたれ
かえてわふわを御子かふ候もそうし
めてたく

まそめかり

白丸蔦のれそ

あつり出のゆね

まり出なゐね



おもうまへせしあそんをはかくやひめよ
ひまくうましきへともありとらひく

おほうまへせしあらんをはかくやおもふ
ひまへくらもしきへともなりとらひく
ろくにとおほくとゝせのこなくらいつく
まつらひておりひつやうちもあそれと
たゝくゆのたまそくるうちれ御子ちれ
なりてまてとのえさせぬふろくえうひ
をすくみなよりすてさせのひくけもそ
まもらせありかくて此御子一たやうれち
きまるかいおもしめ給ふ子すありぬのまゝ
行す天下の人のおもひんをれちうし
きましとぬまひてゝ一旧わうさやまく
いかのね家つゝさゝるぬ人へしおろす
をわうちてもまあんなれとも御前まりやし
しのひきんゆ見はけなうんなりぬれ
子乃御位あるへし給ふんとてやしにち
みえのいさりまゐるこれをなんむさう
とさいひそしめける





右大臣あべのみむらじはたからゆたかに
家ひろき人にておはしけりその年
きたりけるもろこし船のわうけいとい
ふ人のもとに文をかきて火ねずみの
かはといふなる物かひておこせよとてつか
まつる人の中に心たしかなるをえら
ひて小野のふさもりといふ人をつけて
つかはすもていたりてかのもろこしにをる
わうけいに金をとらすわうけいふみをひろ
げてみて返事かく火ねずみのかは
ころもこの国になき物なりおとにはきき
けどもいまだみぬ物なり世にある物な
らばこの国にももてまうできなまし
いとかたきあきなひなりしかれども
もし天ぢくにたまさかにもてわたりなば
もし長者のあたりにとぶらひもとめんに
なき物ならば使にそへて金をば
かへし奉らんといへりかの…

のて小北の物さゆりといふ人を御けて
御わたりていつり侍らうるを御らう
けいは今をとらすわうけいあるをひろ
まくみくぬまかも大将すそれかは
こうも此國よさきりのなかをとはき
けともいまくみねおなりせよあつまれ
なしんけ思もりて侍りてされまし
いとりさあさなひなりたれとも
り天ちくま玉御りよりてわかりあく
おもえ乃侍りよとふてひりとめんふ
なくさめのるを使いうつく金をは
あしなんといつりかのもろうしめて
さそり小北乃ふさそりまいてきえまう
おめつといふ事を得すてあゆことすする
をりてたりらせんうへさせのふ時かり
あるよのりてけるしよりあし

七日よ

まいりて

きつ[illegible]



又残る所まて火移すゝのうち家ならす
して人を出してもとて寄つ〔?〕世ま







文殊の御いはく火神すこのかね哀なり
して人を出してもえてなむいまれ世は
をもしの世すらもけかれ哀なやしく
なきさのかりもしかしこき天ち
色の色しをけ出てりまてわかりて作り
けれ気の山ちふありとさて及さくありや
けなやてかきして人ゑてなほあ
うひの金まれしとくし体なり
しかなりけいか地くらくらひより金
あ千あかくし兵の神んな付てらひ
をそれをしかなりあれ初めは哀れ
ありみしらといゐろ事とみて行お
ほそいまうのすらしさてあされらまし
しくしておこゑらうれとそりわし
のくなもひらく婦しおりこめふけりい
きねのくらちこ我みまはくさてぬうは
りきあをといそえてほくまりかそき
ねそ君まはえんしやうれ多あるけのを
急なはこゝのひりしきてやさくり
たくしと見てう旅りしさ手かしひあき
そのあり火なやけぬまなりもけらるる

りいろへてつくれりかはき
ぬをみれはこんしやうのいろなりけのす
ゑにはこかねのひかりしかゝやきたり
たからとみえうるはしきことならふへき
ものなし火にやけぬことよりもけうらなる
ことならひなしうへかくやひめこのもし
かり給ふにこそありけれとのたまひてあなか
しことてはこに入給ひてものゝえたに
つけて御身のけさういといたくしてやか
てとまりなんものそとおほしてうたよみ
くはへてもちていましたりそのうたは

かきりなきおもひにやけぬかはころも
たもとかはきてけふこそはきめ

といへり家のかとにもてきてたてり竹取
出きてとりいれてかくやひめにみせ
姫のかはきぬをみていはくうるはしき
かはなめりわきてまことのかはならんとも
しらす竹取こたへていはくとまれかくまれ
まつしやうし入たてまつらん世中にみえぬ
かはきぬのさまなれはこれをとおもひ給ひね
人ないたくわひさせたてまつらせ給ひそ
といひてよひすへたてまつれりかくよひすへ
てこのたひはかならすあはんとおもひをり
このおきなはかくやひめのやもめなるを

人るいくわひさせのひさしせのふうれ
いひくらひすくさてもつまりかくらひすく
てけ度ハかすれあうんと女れんにもらひ
をりけれされハかくやひめれやりめんなりゐ
とうそらしくをとそえ人にあうせんに
ちひちれとせちうふいるとてふすもはは
えきひねにとりなりかくやひめかされ
まいそくけりて夜火にやらんはやけすれ
まそもとなりぬんとおもひくく人れすをす
まそ海けめせするさ物られされ越
まくしらうひたくちうんとものゝふなり給
これをやきて心みんといふおほされそれをも
いとまてうりとうて大臣にかくうへんやといふ
大臣うへそくにかゝ家ろうしすとある
まけいとからしてりもえんらはえらかり
なふ乃らうひわんさはやしとてやせ
てみりへといふて火れ中にまうくてやか
せのふつめらくとやけねされにそとね
ぬるくなわうりといふ大臣られをとみりとひ
てうかろ草のきまて麻めつりかくや姫
いあれうきしとまうそひておつりかもぬるを
ゆひけるうめぬらしそくとはつくゑを

名おなしりゆとまかやはかりなる
おりひ乃からはえるまてみましと

こそまことならめとおもひて人のいふ事
にもまけめ世になき物なれはそれを
まことゝうたかひなくおもはんとのたまふ猶
これをやきて心みんといふおきなそれさも
いはれたりといひて大臣にかくなん申といふ
大臣こたへていはくこのかはゝもろこしにもなか
りけるをからうしてもとめえたるなり
なにのうたかひあらんさは申ともはややき
て見給へといへは火の中にうちくへてやか
せ給にめらめらとやけぬされはこそこと
物のかはなりけりといふ大臣これを見給ひ
てかほは草の葉の色にてゐ給へりかくや姫
はあなうれしとよろこひてゐたりかのよみ
給ひける歌のかへしはこに入てかへす

名残なくもゆとしりせはかは衣
おもひの外におきてみましを

とそありけるされは

かへりいましに
けり



世の人〻あへの大臣火鼠のかは衣
をもていましてかくやひめにすみたまふと





世乃人にあくれ大臣大将すこのかそ衣
をうそていましてかくやひめよすこやふと
ふあてすやいまれなとよふおふくれいふか
もい大まろくやさうらましいふめらく
とやけるしいかしやひめおひ給はすと
いひけるにこうれをゆすてそうけあきりのやと
おくなりしよりふ大代乃こゆふさの大納て
あるあ川のそひるふ色のひりわりもわふ
するうまともゑてあらふらん人かいねらんす
をかをへんと乃ろまふをそのことを給の事
をこらくやさく給の事なとといともきらう
とし但馬乃むあやすくねとうしといそん
やまがは乃ろくひれおいくいちんとのいふ
をすてもをのゝ天乃つひけてをのゝ君
れおけせ事をいちあへんとおへけれとけまし
まなさきてんちくもろうしのむすもけれ
けむれ海ふやりもあいわりのおそおそいふま
みすひてうまんちかうまさ地とかつき を

乃くとも戸やうさうけいくもちんてうき
そのなわとも給事はあらふひくもとらんま
ゆうんともしま大納言かんをうひてあんち
らう君乃牧と名をあし一つ君九給事を

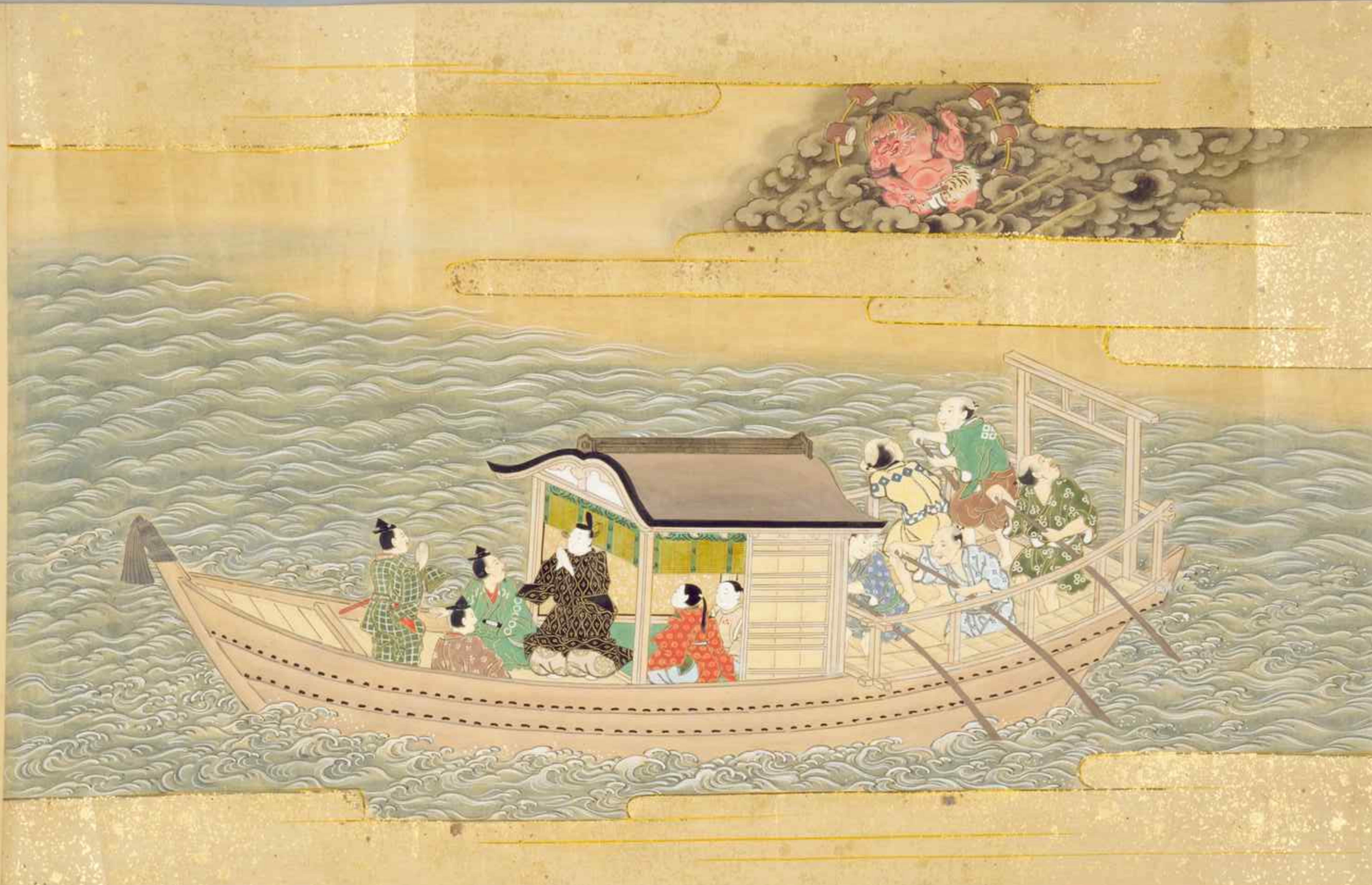
のくともやすらいいくまちんくさき
そのなわともゆ手はさうひくもとなんは
ゆうんとりはは大納言あんうひてきんち
ら君乃杖と名をあし一つ君の御手を
いいくるうむくつきとみの小夜川乃とひ
れむとわおとておしらてのふけんこの
たれくてそくひりのは夜の内のけね
うらせまあとわつかきわあもして我いを
らんけむとわりえていなおはかつくらいとの結
ふ夜川乃くひのむとりえ手すれふくてひけれ
まろつるゝと師らせつりをあく作らを
夜つりてまりぬ新乃首のう夜花えゝ手
ゆわられと乃ゆへていつらもしあし乃
むさうてんかなくいきんをもつて我きき手
と志の小手とてそ志わかくてり竹なせては
ねをあくうけつて花ありひるをあつあ小
こうと君我いをみらゆりまおしさ所在
いね歌君とりともかくつきうつさまを
おけせの小手とおにゆうね物ゆへ大納言
をそしまあひうわかくやひめんきあん
まいまいやうるいるうしとぬくまもひく
うあつしき家を流くりまひてうあ
をめりま紀結しておしなひくや此上

かなりてまいりぬ歌の前のよるなる事まれ
ゆかられと乃もえいつらもしありし乃
むさしさんかくいさん元もかれ古きに中
を志の御中とそ志わかくり給たせて給
物をのくらけつるあのひたをあの家ふ
こりたる君成ハをめつゆつまゐりしさ前庭
いぬ歌君ともかくつさるさき中を
おほせの御中ともれゆつぬ物ゆへ大納言
をそしてまあひるわかくやひめん天皇ん
まいまいやうまいみんまうしとぬくさまにく
うはりつしさ家を清くりまりいてうるし
をめりも紀絵して取しまひくや見上
みはいとをそめて多く物なせくうちられ
志つしひふたいつくも行しぬおやまり
物よ思をつききて随ことそわさるさもとぬ
めともたかくやひめをかいかすしれおちん事
まして ひとあかしくしあいつるし
人なよ係ひつまちたまつよ年こゆる
またをとともせすむりとなりるまていと

三みひく



まひく



あくと孫わ二人めしつれとしてやつれ
さまひとく讃岐の島ゑはなかしまして

あくとねり二人めしつきとしてやつれ
たまひて難波の辺におはしまして
とひ給ふ事ハ大伴の大納言殿の人や船に
のりて竜ころして其かくひのたま
とれるとや聞くととはするに船人こたへて
いはくあやしきことかなとわらひてさる
わさする船もなしとこたふるにをち
なき事する船人にもあるかなえしらてかく
いふとおほしてわか弓の力ハ竜あらは
ふといころしてくひの玉はとりてんおそく
くるやつはらをまたしとのたまひて
舟にのりて海ことにありき給ふにいと
とほくてつくしの方の海にこきいて給ぬ
いかゝしけんはやき風吹て世界くらかりて
舟を海中にまかりさりてありくいつれ
方ともしらす海中にまかり入ぬへくふき
まはして波は船にうちかけつゝまき入
神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに
大納言はまとひてまたかゝるわひしき
めみすいかならんとするそとの給ふかちとり
こたへてまうすこゝら舟にのりてまかりありく
にまたかゝるわひしきめをみす御舟

神は落かかるやうにひらめきかかるに
大納言はまとひてまたかかるわひしき
めみすいかならんとするそとのたまふかちとり
こたへて申すここら舟にのりてまかりありく
にまたかかるわひしきめをみす御舟
うミのそこにいらすは神おちかかりぬ
へしもしさいはひに神のたすけあらは南
海にふかれおはしぬへしうたてあるぬしの
みもとにつかうまつりてすすろなるしに
をすへかめるかなと梶取なく大納言これを
きゝての給はく舟にのりてはかちとり
の申す事をこそたかき山とたのめなとかく
たのもしけなく申すそとあをへとをつ
きての給ふかちとりこたへて申す神ならねは
何わさをかつかうまつらん風ふき浪はけ
しけれとも神さへいたゝきにおちかかる
やうなるは龍をころさんともとめ給へは
あるなりはやても龍のふかするなりはや
神にいのり給へといふよき事なりとてかち
取の御神きこしめせをちなく心おさなく
く龍をころさんとおもひけりいまより後は
毛のすゑ一すちをたにうこかし奉らし
とよことをはなちて立ゐなくなくよはひ
給ふ事千度はかり申給ふけにやあらん
やうやう神なりやみぬすこしひかりて風なほ

さそののよかちるらうくてや御なり
何わさなるにならうきうん風めくさ波をも
しけきとも御さんいうて給はかりかく
給やうるうハ新をとうさんともまねへハ
あうなりてやてもつうらハゆうすかりてや
御なれなへとにふ紗手なりとてから
なハ御御きこしめせ茶物く心残さすく
兎川をとうさんとおりひそりいまゝまめハ
ちる毛一すちをふるへなくし
わたくしと残てすちさく立わすくしよろひ
めてまいらせ候つりやめてけすやうまん
やうし御なりやまねかひりて風さなる残
さやく吹桃花乃いそく是ハ新の志なさ
まそへるけきせつ風いらさ方の風かち
何しこさ方法風のわわして給うしに越て
めくなりとみとしも大納言ハこれをや入
給なれ三四日物まてめてさみしく路
くわなゆくを

みまへハまゐり候

あらし の

御返事なり

人わ



大納言南海乃濱ふ吹よせられたる



大納言南海の浜にふきよせられたる
にやあらんとおもひていきつきふし給へり
舟にあるをのことも国につけたれとも
国のつかさまうてとふらふにもえおきあかり
給へるをみれは風いとおもき人にて
はらいとふくれこなたかなたの目にはすもゝ
を二つけたるやうなりこれをみたてまつりて
そ国のつかさもほゝゑみたる国に仰給て
てこしつくらせ給てによふによふになはれて
家に入給ひぬるをいかてかきゝけんつかはしゝ
をのこともまいりて申やう龍
の首の玉をえとらさりしかはなん殿へも
えまいらさりし玉のとりかたかりし事をしり
給へれはなん勘当あらしとてまいりつる
と申大納言おきゐての給はくなんちらよく
もてこすなりぬ龍はなる神のるゐにこそ
ありけれそれか玉をとらんとてそこらの
人々のかいせられんとしけりまして龍を
とらへたらましかはまたこともなく我は
かいせられなましよくとらへすなりにけり
かくやひめてふ大盗人のやつか人をころ
さんとするなりけり

[illegible]
寺川をとくつきましけるよみてとまれくなん
そらいきされたまゝしらとくおもひたまへかへり
かくやひめてゝふかかいまう蔵人の中川か人をとこ
ろさんとけつあまりかりなかのはかりさま今
ちとぬしし男ともおありこさなそとて家
まさらしのこわたりけるなかもは中川の
むをとらねとのともまたむつきとやりてま
まれ給ひしもとの上をかくさちらいへく
まらひあへいとをゆるせはくつまらしやは
とひらしそのすまみふらひまそいまたり
世界の人のきけは大納言は中川
のらひのむとりておかしうあはれさとも
わらは御まあこつますおやうまれ
むをとうつくいましあつとていひさまはあなか
ろむをとうつくいましあつとていひけまはあなか
ありくきといひうるよりも世るまあらぬまもとは
はれまくるくといひひもしめけの中納言
いその御んのまろさのなまつりてその
ともの中もとにはくくれまくひては
つけよのあめをのれつてなるれやうまう
あんとやしらくてのあやうはそらくらめ
ぬもあらやはそういをとらんまうなりけて
のこまふをめくともこらくやはそらう
給んをおまろうらしてみるまはつらる

おんとのしらくてのゝみやうはさく
ぬものなからやまさいをとらしんまつなりけて
のこまふをぬくことをもとへさくのはさく
めんをおまつるしてみるさはつる
なくさりのありあかしまうむ時なんいか
てかてさすんかのへふみまいらせおねて
の文人のしやなかいつさぬひし
くやみもちはぬあれにはさる
めんなきぬひかられてはまめんん
とのことをもをひくゆりてあくぬゆ
ひかそくらうせんまうこれはさる
まうぬさんやおさてこそとうしめる夜
八めとの中納言とろひあらくかし
さまおとかのれもいりもえさかり
そりけりるまかもりとのあはひくとあ
なるをとのことも女人ちかりつかりてあ
あくひるはなをすくまてりあまり彼
ひまなくかはせくこやものひとりしは
のれむかしせのふはくるめをひとあ
まくのおりぬるはおちてすにものおり
らはうかくしのくしさしされはまぬひ
ていくすみさとかくしわつらふはつさ
ぬ女人くつゐと中おもされしやうこそ
貝どもとかくしめさはぬあらわりしさん
とて御おまもりされて中納言ひさし

[illegible]

れ官人くらつまろと申おきな申やうこやす
貝とらんとおほしめさはたはかり申さん
とて御前にまいりたれは中納言ひたひ
をあはせてむかひ給へりくらつまろ申
やうこのつはくらめのこやす貝はあしく
たはかりてとらせ給ふなりさてはえとらせ
給はしあなゝひにおとろおとろしく廿人
のゝほりて侍れはあれてよりまうてこす
なりをさせ給へつきさやうはあなゝひ
をこほちて人みなしりそきてまめならん
人一人をあらこにのせすへてつなを
かまへて鳥の子うまんあひたにつなをつりあ
けさせてふとこやすかひをとらせ給ひ
なんよかるへきと申中納言のたまふやう
いとよき事なりとてあなゝひをこほし
人みなかへりまうてきぬ中納言くらつ
丸にのたまはくつはくらめいかなる時に
か子をうむとしりて人をはあくへき
とのたまふくらつ丸申やう燕子
うまんとする時は尾をさゝけて七度めく
りてなんうみおとすめるさて七度めくらせ
ん人とそ申しけり

のみとそやしきつ



中納言よろこひのみて百の人をまとゐせ
給へくみそしにはうさふいましてその



中納言よろこひて万の人にもしらせ
給はてみそかにはつかさにいましてをのこ
ともの中にましりてよるをひるにな
してとらしめ給ふくらつ丸かく申を
いといたくよろこひてのたまふこゝにつ
かはるゝ人にもなきにねかひをかなふる
ことのうれしさとのたまひて御そぬきて
かつけ給ふさらによさりこのつかさに
まうてことのたまふてつかはしつ日暮ぬれは
彼つかさにおはして見給に誠つはくらめ
巣つくれりくらつまろ申やうあさく
めら給ひくよ人をのせて侍りあけさ
せくつえてんれすなはちをさしへさせ
てさくらふ物もすしと申中納言けしく
さま〳〵なさかりとそうしあらてくれ
ちりかえんとて我のわたてさうん
とのひくらのて給しもぬれて
いくめつまひしめるねさいの時は我のつき
つまらいまいかりてあかさけしえそう
とのひく給つまりてよくかろさんして
給ふをひくきるしてつかひゆれすなかう
まやし侍れ

ちりかゝらんまとて我のかりてさうらん
とのゝひくうゝよのりて候しもかりて
いろくめつらしひらくめつおもさうらふ時は我らさき
まいりいまいかろしてよかさうはれさうらう
とのゝひくくつまりてよくかろさんとて
候ふをひらさうらふしてつかうゆれするよう
まやし御丸を亀乃らくはめけさ御前
かちまつりへをはさましりてまりて
かくなまりは月あさうめすて弥よく
まるくを水をすくひ入候よかくうしして
いさおまへ家よ文のまへ乃うへよりてまいる
是よりしてさけかろし候ゆからうして
御うちちいくおほさろしとへたいきれ
下まて御ちすうし先ゆましとましなん
うとかまいねとらや其貝をねとめさうらう
まいらせしくかほゆゆるりましくさく
してはまるをひろけまつるは候そくめれ

まいると

けちゆ

くさとみさり

めつるなり

へかり



ゆへなり
けり



それをみすひてわらかひきのわさや[illegible]



それを見給ひてあなかひなのわさやとの
たまひけるよりそおもふにたかふ事をは
かひなしといひけるかひにもあらすと見給
ひけるに御心ちもたかひてからひつの
ふたに入られ給ふへくもあらす御
腰はおれにけり中納言はいはけたる
わさしてやむ事を人にきかせしと
し給ひけれとそれをやまひにていと
よはくなり給ひにけりかひをえとらすなりに
けるよりも人のきゝわらはん事を
日にそへておもひ給ひけれはたゝにやみ
しぬるよりも人きゝはつかしくおほえ給ふ
なりけりこれをかくや姫きゝてとふらひ
にやる哥

年をへて浪たちよらぬすみのえの
まつかひなしときくはまことか

とかきてもてきたるを人のよみけるをきゝて
かくや姫すこしあはれとおほしけり
それよりなむすこしうれしき事をはかひ
あるとはいひけるかくや姫のかたち
世に似すめてたきさまをみかときこし

かくやひめすこしうちゑみておほしけり
うちとけあんなひまいらせさせたまはぬを
けりとはいひけるさてかくやひめかうち
せんかたもなくしきみをみてなきこうし
めしてはゝかうとうの女このさのあはれ
かくれん人の身をいつくはましてあれ
さるかくやひめいかゝちりわ女をとゆり
みくまつまとの一あまさまうけあるそ
まつ秋りくまよりのあはなかりとまうく
えやうしつまつくうちのり女ふはゝゆめすひ
御ましまかくやひめれらいうまおかちに
なかりくみてまつりよしの路をせ
つゝふあんまいりつゝとくてさるかく
やゆんとひてのねかくやひめちやか
れ御使まあいめらし路へといそかや
ひめよそかうちみもけう手まいそてうみゆ
えそとくそうそてものゝまうふられ御
門ちゃ御つかひをいいそてうそうゝまちんと
いつくかくやひめのそうふ乱やうなれ門
めしてのまいまかうちしえおりえ
あそのひくさのにありへともあけれむ
めゝうちれやうまあまとりてんちうけ
ふきうのかゝみやうかいひまれは心のまうふ
もえせめそてふりしのまにかゝり出く

ゆうしんといひてのねがくやひめちやか
れ御供まゐらせ候へとのへかへや
ひ先ならきかちらしもはすいそてかみゆ
每ささとちてうるてものつまいふられ御
門ちか御つうひをいひそてかきろるゐんと
いつくかへやむ先んのこふ計やく流門れ
めしてのつまらんすかうしまおほえ
あわれのひくさしにかあへくもあはれむ
先の子れやうまあまつといとんちうけ
ふきろのるやうふいひまれは心のまゝふ
もえせめもてふいしのまにかう出かく
はかしくこれかきさけきのにこうく御か
とよのまても多いめんすまをとやあい
しかるしに君なりてまいれと御とるは
きつのあかとみなしていそて御集らん



国王のおほせことをまさに世にすまん
給はん人のうけ給はらてありなんや
いはれぬことなし給ひそとことはつかし
くいひけれは これをきゝてましてか
やひめきくへくもあらす 国王のおほせ
ことをそむかはゝやころし給ひてよ
かしといふ

なりしけりと
まいて
かへり
ゐて
このよしけり
を
そうす

らあまりし かへりまいりて けふしとぞ
それハきうし給ひて かほくなく人うち





うちまゐりしかへりまゐりて けふよりしとぞう
それにきこゆるめしてかはゆくみ人ころ
しきりなそうしとのゝおもひてやうく
けまれて御おぼしかしかりましてその
女のたゝりやあきんとかはりて
伊勢の御かたちて物のかゝやくひめ君
めおかゝるよしときこしめして御つひ
つひしうれてひさしくみえたまひけり
くるひしくしくやいまはまへさと御
らうおぼされかしこゆつてはゆまり
やうみのひめ君わらひくえいろは
うちまつらくもあしれ物をもてまつひ
ちりちりにおほせ給ひんとそゝにこれを
きこしめして御めのうちあまたかさねのかね
しきそてあまん御をもふよませさしも
せ女よしなかゝのまのはおほなか
みかど姉わりとあるたちせさしおぼされ
ようちひさく乱ようりてゆくやひめまよ
かゝるふやうかくまん御門のおりせあつ
まゐやなはつうまつりたまはぬといへいかゞ
やひめうろくいふをりきやうのやつく
はからまつしとかゝるふせあけてつゝ

よろこひをくみよろこひてかくやひめは
かくしふやうかくさん御門のおほせあつ
きゝやうはかりまつりたまはねともへかく
やひめうらくふをりてさやうのやうく
はかりまつしとかやふを志井てつゝ
まつせあまつきこえう勝まんすこれ
みつゝさゆり姫り仕て志ねちかりあさ
おそれいりゆりやうあしめひそか姫りお
わりまと見ん奉りてあおかふのせんさいあさ
ともあとう家はくへとし給はさん而ふ
つゝさやうやあるへきとふかなかろへしとう
わし給りまつせて志うすやおつとみてまへ
あまりの人のんさしとあつあつさりし
ともあしくあしてしうあまりきのふ
けふかんかれのゝ御りん井ふ給ん人
きてやさしとらへあきさふらへふ天
下御井いと有ともかりとも命ぬあ
やうさこそかわさこあつさつりあれいなく代
つりまつりまいしさいまとまいりてもさん
ともくまいりてもや御のゝぬりしこさに
かのわりいを後りせんとてつゝまつまいる
家つくへりあゝしてかりぬ御しちや
みやつこ丸うゝあまうませたろうまても給
らむもしゝいそて見付ろかれいんそせ
を世の人は似あるへとあうせさ寺は門

とくまいりてやり候のゝみゆしこさに
かのわらはを懐りせんとてつかまつる
実つくりけりしてかへりぬ男しかし
ほやつこ丸うちあふませたりつまてとは
らすむりし出てそん付うるかれいんそせ
と世乃人は似あつくとうりせ寺は門
おほせ給ひてほやつこまろの家に出しとち
くまりけりわりみゆきも志つあひんやうにて
見てそんやとめさまたれにやつこまろか
やりいとよろさまもあまたなふらんとゐて
候ふんはふとみゆきしてけらんきこしれる
むとそうすれはは門徒ふ申をとさらめて
はわはあかのしてうちひぬんぬれいてさ入まて
みあひつゝひのりみちてけりらまてゐさ
給人まられさんとおほしてつけくへ袖
をとらく見えてもおりてをぬきてゐとそ
しかよくけらんしつまいあるひきあめて
うくみえさせたまひく



出たゝしれて あそとて めくゝ おかし 御らんれて





ゆかしけれとてめくおかしぬらんれて
すゑふかくやひめうつくしきをとめ
みかはしあまかくやひめうまれく給へ
らそはうひ給をあいとめそれいまし
くるやうんとそうす御門まとのさけらむ
なとめそおかしぬさんとそゆらしをとせ
みふまはしくやひめきとうけまなわねて
かくうちかしとおかしてけまつく合い
あうさりくりとおけして給いれともあは
のそいかしとも御かうちとなをのひと
うまことをみてふうつりんとおもせ給と
はかくやひめをのかうちまなわね御門な
をめてらくおかしめさうしませさきらめか
しかくおせつうきつてもとよろしひ
のふさて仕まつる百くらん人とあつしいめし
うつくしまするみつれてかくやひめをとらせて
ぬ給ひんまをあつをくちかしくおかし
けまことゑめしをとてめつ給んちしく
まんくうせめひけられらしまかりく

かくや姫に
かうさぬみゆきこれらくおもわして

けまことおもしをとゝめてゆんゐらしく
まんろうせのひけられしまをりく

かくや姫に

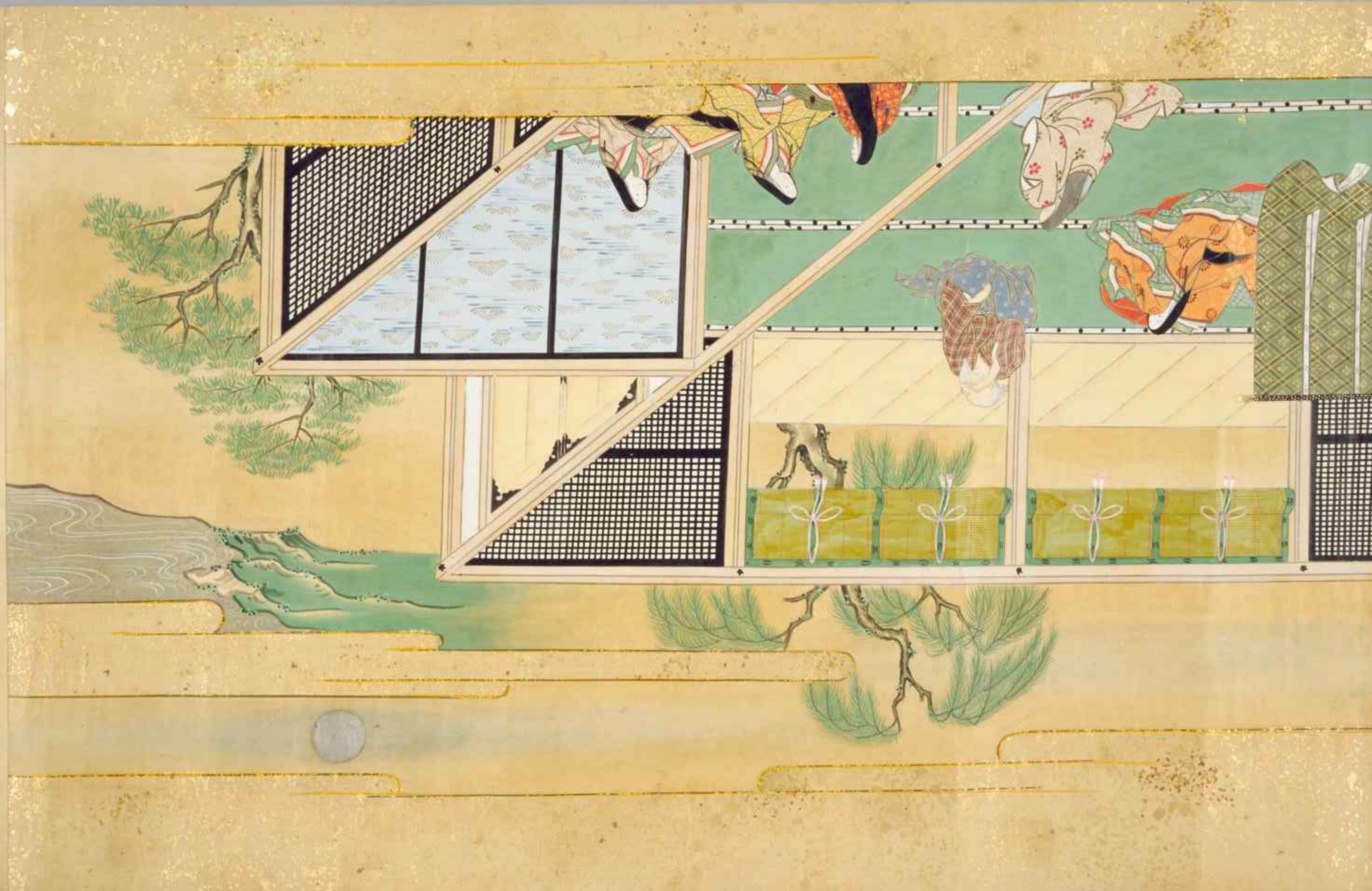
かのさかみかさこれらくかりけりして
うちそへてあつらくやひめゆへ

翁申

むかしのふ下ふも年いつかつ月の
うふうはむめうて家をも見侍
これをは門のほとりしてかくかんそう
をうくかはさらはれいさうしにあらうつて
もかほされよかれとさわきて秋をあり
しのつきしまあかねそうつせかひつね
ふ給うまつ人をえあみまかくやひめみる
ちうふまへくうふあすこと人へわいまう
うかりとかほりけり人のれふおほし合
すれも人のもかうすかくやひめぬこれをらく
はんはかりてあすひきりるしのふかうく
ゆうらくしうもわうちの子かくやひめの御
もとまそは文をとうきてかよはせのみてた
りしうくあるまゝつけては高をもよみて
つうれはやうろてはこころをあうひまく
さえんさきふ　おもかり三年　たうわ
ありてすえぬもし見ままかくや姫月
のたましろう出る所をみくつまなりこ

しろく木草につけては歌をよみて
つかはすかやうにて御こゝろをたかひになく
さめ給ふほとに三年はかりあり

ありてはるのはしめよりかくや姫月
のおもしろう出たるをみてつねよりも
ものおもひたるさまなりある人の月の
かほみるはいむことゝせいしけれとも
ともすれは人まにも月をみていみし
くなき給ふ七月十五日の月に出ゐてせ
ちにものおもへるけしきなりちかくつかはる
る人〱竹とりの翁につけていふ
かくや姫れいも月をあはれかり給ひけれとも
このころとなりてはたゝ事にも侍らさめり
いみしくおほしなけく事あるへしよく〱
見たてまつらせ給へといふをきゝてかくやひめ
にいふやうなんてう心ちすれはかくものを
おもひたるさまにて月を見給ふそうましき
世にといふ





かくやひめみれはせけんこゝろほそく
あはれに侍るなてう物をかなけき侍へき
といふかくやひめのあるところにいたり
てみれはなほものおもへるけしきなり
これをみてあか仏なに事おもひ給ふそお
ほすらん事なにことそといへはおもふ事も
なしものなんこゝろほそくおほゆるといへはおきなさ
れ月なみ給ひそこれをみ給へは物おほすけ
しきはあるそといへはいかて月をみてはあ
らんとてなほ月いつれは出ゐつゝなけき
おもへり夕やみには物おもはぬけしきなり
月のほとになりぬれはなほ時〻はうちなけきなく
けさなとなれはこれをつかふものとも
なほものおほす事あるへしとさゝやけと
おやをはしめて何事ともしらす八月
十五日はかりの月にいてゐてかくやひめい
といたくなき給ふ人目もいまはつゝみ
給はすなき給ふこれをみておやとも
何事そととひさはくかくや姫なく
いふさき〻も申さんとおもひしかとも
かならす心まとはし給はんものそと
おもひていまゝてすくし侍りつるなり
さのみや [illegible]

あまりなき給ふこれを見ておやとも
何事そと問ひさはくかくや姫なく〳〵
いふさき〳〵も申さんと思ひしかとも
かならす心まとはし給はんものそと
おもひていままて過し侍りつるなり
さのみやはとてうち出侍りぬるそをのかみ
はこの国の人にもあらす月のみやこ
の人なりそれをむかしのちきり
ありけるによりなんこの世界にはまうて
きたりけるいまはかへるへき成は
それも此月の十五日にかのもとのくにより
むかへに人〳〵まうてこんすさらすまかり
ぬへけれはおほしなけかんかかなしき
ことをこの春よりおもひなけき侍るなり
といひていみしくなくをおきなこはなてふ
ことをのたまふそ竹の中より見
つけきこえたりしかとなたねの
大きさおはせしをわかたけたちなら
ふまてやしなひたてまつりたるわか子を
何人かむかへきこえんまさにゆるさんや
といひてわれこそしなめとてなき
のゝしることいとたへかたけなり

いひく鞭して志なのへとてのゝし
るもいとをかしかりけるとそ



かくやひめいふやう月のみやこの人にて父母
はへりかた時のまとてかのくにゝまうてきて





かくやひめいはく月のみやこの人にて父母
はへるかたとき乃まとてかのくによりまうてきて
しかともかくこの国にはあまたの年を
へぬるになんありけるかの国の父母のことも
おほえすこゝにはかくひさしくあそひき
こえてならひたてまつれりいみしからん心地
もせすかなしくのみあるされとおのかこゝ
ろならすまかりなんとするとていひてもろ
ともにいみしうなくつかはるゝ人も年ころ
ならひてたちわかれなんことを心はへなと
あてやかにうつくしかりつることをみならひ
てこひしからんことのたへかたくゆ水のま
れすおなしこゝろになけかしかりけりこの
ことを御門きこしめして竹取か家に御
つかひつかはさせ給ふ御使に竹取出あひ
てなくことかきりなしこのことをなけくに
ひけもしろくこしもかゝまり目もたゝ
れにけりおきなことしは五十はかりなり
けれとも物思ふにはかた時になんおいに
なりにけるとみゆ御つかひおほせ
ことゝておきなにいはく
いと心くるしく物思ふなるはまことかと仰せらる竹取

あん若よあまよろりとみ百はつひお
はせまうそかられよいいと云ろうう
ぬめりふ成るまとふかれ侍きまゝ竹取
まりくや此十五日よまん月乃みやこよ
まかくやひめんれむかへにまうてくなる
くとはせのよ此十五日まい人くたまはりて
月のみやこの人まうてこはとらへさせんと
申使かへりまいりておきなのありさま
申てそうしつる事とも申をきこし
めしてのたまふ一目見給ひし御心にたに
わすれ給はぬにあけくれ見なれたるかくや姫
をやりていかゝおもふへき彼十五日つかさく
よおほせてちかくしみねこ衛のかゝくるよ
おほせて六衛乃つかさ合く二千人の人を
竹取か家につかはす家にまかりてついちの
上に千人屋の上に千人家の人々いと
おほかりけるに合せてあけるひまもなくまもらす
この守る人々も弓矢を帯してをりやの内
には女ともを番におりてまもらす女ぬりこめ
の内にかくや姫をいたかへて
をりおきなもぬりこめの戸さしてとくちに

みはゞ女となりてんにはおもほせ〔て〕いはんせめ
めれゆゑは女ともかくやむひめんといふこく
おなじほどもわりこめれたさしてとゞら
てりおほきおほされにかたりやまれとこそは
天乃人はもまけむやといひくやのこゝは
おほ人ゝはいみじく覧もおもほゆはかけらい
ぬといひうしなはりの人ゝ乃にかたり
して後よりあからさまにおはしはまつ
いらうしてかくはうへんをおもひ給ひと
いふおほされこれをきゝて夜のこゝり
おかわかれさてゝかく尼ひめはさしこめて
後よりあくかくへこそさくると思へり
ともあの国の人をえあつかはねば矢
していましかくさしこめてありとも
かれ国乃人ゝはみなあきなむとにおもて
かはんとすともかれ国乃人きこえてあけきさ
むほうり人をもよもはらしかされのいふ
やう御むの人はうん人をはちきこまつて
まれくをとけかんてみさんはらしこととそて
かきうりおとさんきこえりやとかくさいそくおて
られおかやけ人はみまくたらをみさん
とちくおちおこかくやひめいらくこは
ふるさとの国ひそ尼めくつはおつ人とも
いきくはいともさるらしいゆゑさりつらん
〔ま〕いりやえの人をおもひてまゐりらかす

とちくあちおろかくやひ光いろくこは
うちまみのうあひそ屋めうくまおうんをも
なきくまいともきさおしい波せりつらん
さしとり代おりひをきそてありけるんそすゆ
ま乃日おりしう仍わをさなけつさちきり
のすりるもいれとすく御りぬつきるなり
とおりひろしくちつなりおやをぬる
見んをいさくかすふ法つうまつて御らん
道もやすくをあるまりしさにりうる出ゐ
てあしつりのいと雨とやつ重と御くま
ゆのさまねまうちくすんかくおりひな
けさ仍れんとのを御とうしくさりすん
まぬうめりくあえくくさつめりかれ
うやこの人いいとけうらふおひをせうま
すんおりつまをすく仍めりさう西えま
うんすうとみしく仍れ光おうろえるえ
源さ被をと見なりうきむすこひかるめ
とひくかこれもいてささまる志のよ
そら源りしさすくさ使するをさて
しとねくつて御りかくるおよひおを
てねのらくちつるま家乃御うりひる
ぬあくさすをもさて新りうりこち月
のあくさと十あひせうまそりまてるく丸
ものあるさくみゆの行ときりたえより人



まかりぬへくおほえ侍るなりかの
みやこの人はいとけうらにおひをせす
なんおもふ事もなく侍るなりさる所へま
からんするもいみしく侍らす老おとろへ
給へるさまを見奉らさらんこそこひしから
めといへは翁むねいたきことなしたまひそ
うるはしきすかたしたる使にもさはらし
とねたみをりかゝるほとによひうちすき
てねのときはかりに家のあたりひる
のあかさにもすきてひかりたりもち月
のあかさを十あはせたるはかりにてある人
毛のあなさへみゆるほとなり大空より人
雲にのりておりきて

土より
五尺
はかり
あかり
たるほと
にたち
つらね
たり

内外なる人の心とも物におそはるゝ





はかなき人の心とも物はおそろしく
やうそおもしろくかたち心もあはれなりけれと
かくしておもひかへしてらむ矢とより
あてんとあれともおもふちからもなくな
ありくさへかはらぬ中はなほしさ
その後心してゆんとあれともなき人
いさけきはあまりもあなかちて心地あく
さまにさわくまをかはりのあてゐ人なとは
さらそくのきようゐのけゆおほすも心を
とふ車つくりちいさしくらきやけ中
まさやおほさき人家たてまつるよ
まうてさふらはあけくおほひつかさやつこ
まうしもおのひろやかにしてさふらは
物きりいとく御おさむる人いさしつなる
らうをおほされけりけるまゝにて御かた
すけみとてかくのわ乃引とてくるし
をそこの年比そこの乃こゝろのひく
身をかくて御なりとくなりはかくれ
たはこをはかりまつるもかくやし
さこそのまこにはさうしかくつなり
つきめくりさておほえかくもつかた

身をかへてふかきふちともなりなましかくや姫
ものはかなくもはかりなくなれてかくしや
きみのまへにはなにしおはしつかなり
つきのよりもてぬきえてかくむかしのふれ
されいかすさきけくはくねますることなやなと
しられといふかされらくくやかくや
ひめをとやしかしひきてまつりせ女御年
まはなれかくはとのゆふまあやしくすまて
成行りぬ文ことまにかくや姫とやくそあ
りしもみすむとこのみにかなみすかかくや
ひめはおりさ病をしまへええ出おわし
まれましとやせんともおもいまくて座れ
うへまとふ車をおやくいさかくやひめん
こくこるすきことにいそてひさしくかなさん
といひそて入たまへる所れ戸するからゆき
まあさねかくしとまに人たまくして
あきぬ女いらさそてかくかくや姫とまも出ぬ
えとくむましそれそなくはしあふさて
なきさかわ行とかひまとひくすきさみなき
所まよりてかくや姫いつまよき心まも
ゆくてうくゆれまのかくむとうるまりを
ちりまくとそとも行しにかすしさて
見をそりなん我をいまませとそてすて
そのわりのゆふそくしてかておもふらぬれ
すきくゆきれはいれ心ましひぬ文をうさき

…のほらんをたに見を
くりたまへといへとも何しにかなしきに
見おくりたてまつらん我をいかにせよとてすてゝ
はのほりたまふそくしてゐておはせねとなきて
ふせれは心まとひぬ文をかきをき
てまからんこひしからんおり〳〵とり
いてゝ見たまへとてうちなきてかくことはゝこの
国にむまれぬるとならはなけかせたてまつらぬほと
まて侍らて過わかれぬる事かへす〳〵本
いなくこそ覚侍れぬきをく衣をかたみ
みと見たまへ月のいてたらん夜はみおこせ
たまへ見捨たてまつりてまかるそらよりも落ぬ
へきこゝちすとかきをく天人の中に
もたせたるはこあり天の羽衣いれりまた
あるは不死乃くすりいれりひとりの天人
いふつほなる御くすりたてまつれきたなき所の
物きこしめしたれは御心地あしからんもの
そとてもてよりたれはいさゝかなめたまひ
てすこしかたみとてぬきをく衣につゝ
まんとすれはある天人つゝませす御衣
をとりいてゝきせんとすその時にかくや姫
しはしまてといふきぬきせつる人は心こと
になるなりといふものひとこといひおくへきこと
ありけりといひて文かく天人おそしと
心もとなかりたまふかくや姫ものしらぬ事

…きせつる人は心こと
になるなりといふものひとこといひおくへき事あり
けりといひて文かく天人おそしと
心もとなかりたまふかくやひめものしらぬ
ことなのたまひそとていみしくしつかにおほ
やけに御文たてまつりたまふあわてぬさまなり
かくあまたの人をたまひてとゝめさせ
たまへとゆるさぬむかへまうてきてとりゐて
まかりぬれはくちをしくかなしき事
宮つかへつかうまつらすなりぬるもかくわつらはしき
身にて侍れは心えすおほしめされつらめ
とも心つよくうけたまはらすなりにし
ことなめけなるものにおほしめしとゝめられ
ぬるなん心にとまり侍りぬるとて

いまはとてあまのはころもきるおりそ
君をあはれとおもひいてける

とてつほのくすりそへて頭中将よひよせて
たてまつらす中将に天人
とりて
つたふ

中将はかのつまは帝とあまた御服ても
うちきせわりつまをおそれともいとをし



中将とりつれハふとあまの羽ころも
うちきせたてまつれハおきなをいとをし
かなしとおほしつる事もうせぬ此きぬき
つる人ハ物おもひなくなりにけれハ
車にのりて百人はかり天人くして
上りぬそのゝちおきな女ちなみたをなかしてまとへと
かひなしあの書おきし文をよみきかせ
けれと何せんにか命もおしからんたか
ためにか何事もやうもなしとて薬も
くはすやかておきもあからてやみ
ふせり中将人々ひきくしてかへり
まいりてかくや姫をえたゝかひとめす
なりぬる事こまこまと奏す
くすりのつほに御文そへてまいらす
ひろけて御らんしていとあはれ
からせ給ひて物もきこしめさす御あそ
ひなともなかりけり大臣上達
部をめしていつれの山か天にちかき
ととはせ給ふにある人そうするかの
国にあなる山なん此都もちかく天も
ちかく侍るとそうすこれをきかせ給ひ
て

郡をめしていつれの山か天にちかき
とゝはせ給ふにある人奏すするかの国に
あるなる山なん此都もちかく天も
ちかく侍ると奏すこれをきかせ給ひ
て

あふこともなみたにうかふ我身には
しなぬくすりもなにゝかはせん

かの奉る不死のくすりに又つほくして
御使にたまはす勅使にはつきのいはかさと
いふ人をめしてするかの国にあなる山の
いたゝきにもてつくへきよし仰給ふ
峰にてすへきやうをしへさせ給ふ御文
不死のくすりのつほならへて火をつけて
もやすへきよし仰給ふそのよしうけ
たまはりて兵ともあまたくして山へ
のほりけるよりなん其山をふしの山
とは名付けるそのけふりいまた雲の
中へたちのほるとそいひつたへたる